

キプリングのインドへの道

「ブラッシュウッド・ボーイ」論

橋 本 楨 矩

序

英国からインドに伸びている一本の赤い線を想像してみたい。それはイベリア半島の先端のジブラルタル海峡を経て、(ジブラルタルは1704年以降現在まで英国の植民地である)エジプトのアレクサンドリアに至る。ここから陸路(1857年にはカイロまで鉄道が敷設されていた)でスエズを通り、紅海へ抜けて再び海路をボンベイまたはカルカッタに至る。かつて希望岬を巡った時代は4か月の航海だったのが、2か月に短縮された。この東洋航路を就航していたのが有名なP&Oである。(この汽船会社はキプリングとフォースターの作品にしばしば言及されている) 1869年スエズ運河開通によって時間はさらに短縮された。英国人にとって「王冠の宝石」であるインドはさらに地理的に近くなった。この一本の赤い線を守ることは大英帝国の生命線を守ることであった。1875年英国はスエズ運河株を買収する。ロシア・トルコ戦争でトルコを支援し、キプロスの割譲をうける。これらはすべて1870年代のことである。英国ではジンゴイズムが花開いていた。ロシア南下政策を警戒して英国は1878年に第二次アフガン戦争を始めていた。これもインド防衛のためである。その前年1877年にはヴィクトリア女王はインド皇帝となっていた。ちなみに1865年キプリングがボンベイに生まれた年にはロンドンとカルカッタのあいだの電

信連絡が始まっている。キムとラマ僧が利用する鉄道は1870年にボンベイ、カルカッタ間が完成し、世紀末までに4万軒に達するようになる。つまりヨーロッパ列強による植民地支配の背景にこのような地理空間の縮小があった。日本も1868年の明治維新を経て数十年後にこの植民地争奪戦に巻き込まれていく。キプリングの時代は思ったよりも現代に近い。キプリングより2年遅れて生まれた夏目漱石がロンドンに留学した1900年にはキプリングは人気作家として文壇に地位を確保し、“one of the prophets of the newly-found imperialism”と呼ばれていた。ちなみにガンジーはキプリングに遅れること4年1869年に生まれている。

フォースターの小説の題名*A Passage to India*はホイットマンの詩から取られたものであると言われているが、既に1890年の短編“*At the End of Passage*”でキプリングが*passage*と言う言葉を用いているところを見ると東洋航路はインドのみならず植民地の果(the end of the earth)に至る通路と言う意味を持っていたのである。それは東洋と西洋の掛橋となるスエズ運河をおおらかに人類の兄弟愛の通路として歌うホイットマンの*passage*ではなく、女王陛下の息子たち(インド行政官と軍人)を効率よく植民地に送り出す軍事の路だった。1857年のインドの大反乱(イギリス側はセボイの乱と呼んでいる)の時に英国の軍隊はこの路を通して鎮圧に向かったのである。

14年後の1871年、6才になる一人の男の子が両親に連れられて同じP&Oの船上にいた。父親はジョン・ロックウッド・キプリングと言い、ボンベイの美術学校の校長だった。母親はメソジストの牧師の長女で名前前はアリスと言った。二人は6才になる長男のラドヤードと3才になる長女のアリスにイギリスで教育を受けさせるために祖国へ向かう途中だった。兄妹はサウスシーのキャンベル・ロードのローン・ロッジに住むホロウェイ家に養育費を払って預けられた。続く6年間はラドヤードにとって悲惨な経験となった。彼は後に作家となってその時の体験を脚色した短編“*Baa Baa, Black Sheep*”を書いた。インド人の召使にかしづ

かれ、両親の愛情に包まれた、そしてすこしスポイルされたラドヤードにとって厳格で偏狭な宗教心を押し付けるミセス・ホロウェイの世話になることはまるで天国から地獄への転落であった。精神的に追い詰められて視力を失い掛けたほどであった。彼の唯一の慰めは父親が送ってくれた様々の童話などの本に読み浸り、自分で話しを作り出すことだった。

ラドヤードは16才のとき再びインドに行った。家族と共にラホールに住み、新聞社に勤めた。その間のアングロ・インディアン在生活・風俗の体験を短編集にまとめ*Plain Tales from the Hills*としてカルカッタとロンドンで出版した。1889年ロンドンに戻ったキプリングは珍しい異国の生活のレポーター、時代(帝国主義時代)の代弁者、インベリアリズムの擁護者としてたちまちのうちに売れっ子の作家となった。

キプリングは後年、自分はイギリス人でもなくインド人でもなく「コロニアル」であると述べた。二つの文化と風土にまたがった人生、分裂した意識の持ち主、表向きは男らしい帝国主義者であると同時に子供と遊ぶことを愛する児童文学者、リアリズムとファンタジーが交錯する不思議な文体の持ち主。いろいろな点で二つの方向に引き裂かれているキプリングを象徴する代表的な作品として1895年にアメリカで書かれた“The Brushwood Boy”が最近、批評家の関心を引き付けている。

本論

1895年に*Century Magazine*に発表され、その後、1898年に*The Days work*に収録されたこの作品は当時最も人気のある作品の一つであった。(Peter Keating : *Kipling The Poet*)その後、彼の帝国主義的側面が批判され、作家としての評価が低下するにつれてキプリング：ジンゴイストの象徴としてこの短編はファンにとっても頭痛の種となった。しかし今日再読してみるとキプリングの「隠れたnarrative」あるいは「分裂した語り」として私たちの関心を引き付ける。ランゲル・ジャレルの言葉を借りれば、「偉大なノイローゼ患者」であるキプリングの最も良い症例とし

てこの短編を読み解くことは意義がある。帝国主義者としてのキプリングやストーリー・テラーとしてのキプリングに関心のある批評家には人氣の無い作品であるが、「偉大なノイローゼ患者」キプリングの謎を秘めた作品として読むと多様な読みを許容する、英文学のなかでも極めて稀な作品である。

第一に自伝的な要素を反映している“Baa Baa Black Sheep”の続編のような作品として読むことができる。次ぎに純粹に物語を夢によって統制しようとする当時としては斬新な試みとして読むことができる。また隠れた性的抑圧の物語として読むこともできる。同時に世紀末の英国の帝国主義的少年像のパロディーとして読むこともできる。そしてどの読みも他を否定すること無く並存し得ることがこの短編の優れた所以である。

まず簡単に粗筋を紹介しておきたい。主人公George Cotterは3才のときから不思議な夢を見る子供だった。それは警官が家に侵入し怯える夢である。(初稿ではその警官は家に入った後、敷物を食べてしまう事になっていた)彼は後にPoliceman Dayとして繰り返し夢に登場してGeorgeを捕捉しようとする。ここで分かることはGeorgeは翼のついた広い屋敷に乳母や女中にかしづかれて生活している中流の家庭の息子であることだ。

6才のときに彼は自分で物語を考え出して楽しむことを覚える。しかもそれを秘密にしている事を快樂としている。自分の物語の中で彼は王子になったり、ドラゴン退治の騎士になる。彼のそばにはグリムの童話から出てきたような美人の王女がいる。彼女はAnnieとLouiseを結び付けてAnnieanlouiseと呼ばれている。彼女は不思議な呪いの言葉を知っていて、それによってGeorgeは溺死から救われる。この王女は後にMiriamとして登場し現実世界でGeorgeの恋人となる。

7才のとき彼はオックスフォードに連れていかれる。そこで彼はジョン・ヘンリー・ペパーズのPeppers Ghostを見る。この幻燈装置の舞台では人間の首が飛び、骸骨が踊る。そこで知り合った不思議の国のアリスに

似た少女は彼がナイフで切った傷口を撫でてくれる。10才のときGeorgeはパブリック・スクールに入る。彼がそこで実につけた価値観は「ウォータルーの戦いはイートンの運動場で勝ち取られた」(ウエリントン)というパブリック・スクール精神である。また校長が教えてくれたことは「boysとmenは一貫したもので、一方をコントロールできるものは他方をコントロールできる」と言うことである。彼は勉強、スポーツに秀で、下級生の信頼の篤い少年となる。次ぎに進んだ陸軍士官学校、サンドハーストの時代にも素晴らしい業績を上げながら傲慢になること無く人望のあつい伍長として過ごす。インド時代はごろつきどもの部隊を巧みに管理し、騎士ガラハッドと呼ばれる。女性には好かれたが、彼自身は性的に潔癖であった。やがて何年目かの熱暑期に彼は再び夢を見るようになる。彼は非現実的な幻想の海や内陸部を冒険して歩く。地の果てで香港やジャワを発見し、サンドハースト時代の地図制作を思いださせるマークのついた川や山に出会う。

本論の最後に掲載したキプリング自作の地図の柴(bushwood)のある同じ浜辺から夢の場面が始まる。浜辺で楽しく遊ぶ子供達に取って恐ろしいことはpoliceman Dayに追いかけられることだった。窮地に追い込まれる彼を救ってくれる夢の中の少女はいろいろな名前を持っている。彼女はおとぎ話の中の王女Annianlouiseであり、Georgeがオックスフォードで現実会ったことのある不思議の国のアリスに似た少女でもある。それは性別の明らかでない‘the person’または‘the companion’として現れることもある。少女は次のような隠れたセクシャリティをおもわせる夢の場面にも登場する。

They foregathered in the middle of an endless, hot tropic night, and crept into a huge house that stood, he knew, somewhere north of the railway-station where the people ate among the roses. It was surrounded with gardens, all moist and dripping;

and in one room, reached through leagues of whitewashed passages, a Sick Thing lay in bed. Now the least noise, Georgie knew, would unchain some waiting horror, and his companion knew it, too; but when their eyes met across the bed, Georgie was disgusted to see that she was a child—a little girl in strapped shoes, with her black hair combed back from her forehead.

“What disgraceful folly!” he thought. “Now she could do nothing whatever if Its head came off.”

この場面をフロイト的に解釈すれば、性的抑圧が夢の中に出てきたと言える。性は体験対象として「病めるもの」とされており、それを共有しようとする相手が子供、不思議の国のアリスに似た少女であることがGeorgeにショックを与えている。その場合は引用文中の“Now she could do nothing if Its head came off.”においてheadをmaiden headと解釈することも可能であろう。また単に漠然とした恐怖の対象として“Sick Thing”を解釈することもできる。その場合は7才のときに見たPeppers Ghostのシーンと作者キプリングの子供時代の悪夢の体験の原因であるMrs.Hollowaysが結び付いて“Sick Thing”として夢に出現した可能性も否定できない。ともあれこの短編においては作者が“... dreams swamped the stories.”と書いているように理論や理屈では説明できない夢(繰り返し見たためについには夢の中の土地は覚めているときも実在の土地と思えるようになったとテキストは述べている)が物語を吸収し中断するように仕組まれている。

英国への帰途、ジブラルタルを過ぎて再び彼はbrushwoodの夢を見る。その夢の中ではそれ以前の夢の中の少女と異なって黒髪の女性は“widow's peak”のある成熟した女である。威嚇的な“They”も彼等に友好的な態度を取る。

これらの変化はなにに困ってもたらされたのであろうか？

彼は帰国の船旅に着く前に第二次アフガニスタン戦争と思われる戦いにおいて武勲を立ててDSO(殊勲賞)を貰っている。しかしこれは物語の進行上、特別の事件ではない。彼は既に幾度と無くインド駐留の軍人として見事な手腕を見せているのだ。('imperial boy'としてのGeorgeについては後にまた触れることとする)

問題はP&Oの船上で船旅を共にしたMrs.Zuleikaの言動にある。

“Do you know,”she said, somewhere in the Mediterranean,“I think you’re the very dearest boy I have ever met in my life, and I’d like you to remember me a little. You will when you are older, but I want you to remember me now. You’ll make some girl very happy.”

Mrs. Zuleikaは明らかに性的接触をGeorgeに求めている。この引用文の後で引用した最後のbrushwoodの夢の説明が続き、少女(彼女はグリムの童話の女王から様々の変化を経て、黒髪の女になっている)との初めての接吻が起きる。その場面はこうである。

(they were sitting by the lamp-post hand in hand)she turned and kissed him. He woke with a start, staring at the waving curtain of the cabin door; he could almost have sworn that the kiss was real.

夢の中の接吻がそのまま現実のP&Oの船上での誰かによる接吻であることを暗示して文章は終わっている。しかしもし現実に接吻があったとしたらその相手はこっそり彼の船室に忍び込んだMrs. Zuleika以外には有り得ない。

この事があってからのGeorgeの満足感は彼の表現に現れ、翌朝に隣人

に“*Well, you look beastly fit.*”と言わせている。（キプリングの他の作品で類例を上げると、ドイツ兵の死を見届けた後、長らく独身を通していたメアリ・ポストゲイトが性的陶醉を知ったかのようにすっかり満足しているところをミス・ファウラーに“*quite handsome*”と言われる場面に似ている。）

このP&O船上のMrs. Zuleikaとの（事実と想定される）接吻は複雑な意味を持っている。そのことを考える前にさらに続けて粗筋をまとめておきたい。

自宅に帰ったGeorgeは両親に大歓迎される。英国その物の象徴のような彼の家は芝に孔雀が遊び、薔薇園がある。彼は母親に“*There is no place like England when you've done work.*”と語る。その晩のGeorgeと母親の会話の様子の間接描写はスキャンダラスと言えるまでにセンチメンタルであると批判される箇所である。

Then who should come to tuck him up for the night but the mother? And she sat down on the bed, and they talked for a long hour, as mother and son should, if there is to be any future for the Empire. With a simple woman's deep guile she asked questions and suggested answers that should have waked some sign in the face on the pillow, and there was neither quiver of eyelid nor quickening of breath, neither evasion nor delay in reply. So she blessed him and kissed him on the mouth, which is not always a mother's property, and said something to her husband later, at which he laughed profane and incredulous laughs.

しかしまったく性体験のない息子に満足して「自分のものでない唇に」接吻する母親は実は裏切られている。なぜなら既に彼にはP&OでのMrs. Zuleikaとの（自分では知らない）接吻があるからだ。その後、母親の紹介で合った近隣の州のミリアムは貴族血を引く娘（テキストには彼女がユダヤ

人でないことが強調されている)で遺産相続の見込みがある。彼女と乗馬に出掛けたジョージは彼女が歌う歌を聞くうちに彼女が夢の中の少女であることを知る。彼女もその事を知って驚く。二人の夢は細部までびったり一致している。船上で見た夢の中で二人きりになり、接吻したことを語り合う。彼らの記録は日付まで一致していることを知る。ミリアムはそのとき別の女を見たという。(その女はMrs. Zuleikaであろう。)しかしGeorgeは自分は家族のもの以外に接吻されたことはないと断言する。

Mrs. Zuleikaの存在についてZohreh T.Sullivanは勘違いしているようである。Sullivanは帝国植民地に出掛ける兵士たちを自分の息子として見守る watcher(たとえばヴィクトリア女王)として二人の言及する another womanを考えているようである。しかしこれはMrs. Zuleikaであることにまちがいない。なぜならばGeorgeはミリアムの指摘する another womanを the other woman (これは愛人、妾を暗示する表現だ)と言い換えているし、Georgeの側にもMrs. Zuleikaにたいする特別の好意があったことは明らかである。("He liked Mrs. Zuleika greatly. She was a bit old, of course, but uncommonly nice. There was no nonsense about her.")

伝記的に見れば、Mrs. Zuleikaのモデルとしてキプリングがインドで親しく付き合い、アメリカへの旅を共にしたMrs. Hillを考えることができる。この点については後にまた触れたいと思う。

さて帰国後、紹介された後、ミリアムがピアノを弾きながら歌う"The City of Sleep"を聞いてGeorgeはミリアムが夢の中の少女である事を知る。驚ろくべきことに、ふたりは6才のときからのあらゆる夢を共有していることが分かる。奇妙なのはもともと夢の中の女性は彼がつくりあげた物語の中の王女であった。その女性が作品の最後では生身の現実の成熟したミリアムとして登場することである。(時間と空間を越えて男女の間にテレパシーが作用すると言うモチーフをキプリングは"A Madonna of

the Trenches”で用いている。またギリシャ時代やバイキングの記憶が数世紀を経て現代の人間に再現するというモチーフを“The Finest Story in the World”で用いている。）

ミリアムは「なぜよりもよって私たち二人の間にこんなことが起きたのか」とGeorgeに問うが彼の答えは「死後にはもっと理解できるかもしれない」と答えるのみである。作品の最後で乗馬を終えて家に着いた二人の会話も実に謎めいている。夕食の席で会おうと言うGeorgeにミリアムが次のように答えるところで作品は終わっている。

“Good-bye, Boy, good-bye. Mind the arch! Don't let Rufus bolt into his stables. Good-bye. Yes, I'll come down to dinner; but—what shall I do when I see you in the light!”

ミリアムはGeorgeの作った物語の作中人物である。さらに上に引用したテキストの結末部分はキプリングが作った物語の作中人物としてのミリアムの言葉である。ディナーの席で再び会うことを約束して当座別れる際のミリアムの言葉はさしあたって二つに解釈できる。ひとつは密かに婚約した二人が他の人達の前でどの様に振る舞ったら良いかという若い女性としての戸惑いと恥じらいを示していると解釈できる。もうひとつは元来、夢の世界での結び付きであった二人の関係が明るい光の下の現実界では壊れて消えてしまうのではないかという恐れを現していると解釈できる。Georgeは再び、物語が夢の中に彼女が回帰してしまうのではないかと恐れているように見えるからである。

この短編には二つの大きな物語の筋がある。ひとつは言うまでもなく、幼年期、少年期、青年期と成長していくGeorgeのキャリアである。パブリック・スクール、陸軍学校のサンドハースト、インドでの軍務、帰国と婚約とそれは続く。“Ten years at an English public school do not

encourage dreaming.”と述べられているようにそれは現実原則に完璧に則った模範的な生活である。いわば時代の少年像のスーパー・モデルのようなGeorgeである。ひたすらboyishであることを理想とする彼の男性性は見事にインドにおいて開花する。

ここでキプリングにおいて問題となるimperial boyishnessの特徴を列挙しておこう。

1) 人生をgameの延長と考えること。

2) argot, lingo, codeの閉鎖された言語空間を造ること。

（キプリングはインドに渡ってまもなく、フリー・メイソンのロッジに参加した）

3) 人生はThe Great Gameであると考えことは成長しない危険を犯すこと。

4) 彼等の自己犠牲精神は沈黙によって、さらに神聖性を帯びること。

5) 権威を否定することは信頼関係も無くなると信じること。

6) 権威は常に意識されているとは限らず、不可視なものだが、両親、校長、女王などに具現して、どこからか見張っている、或いは見守っていると考えること。

7) 人生はgameであるから勝敗が付き物であると考えること。

8) boyとgirlは根本的に異なると信じること。

“Now the reserve of a boy is tenfold deeper than the reserve of a maid, she being made for one end only by blind Nature, but man for several.”(*Stalky & Co.*)

9) ヴィクトリア朝後期に好まれたboyに付く形容詞は“lion-hearted” “lion-like” “noble”などである。(Haggardの*She*の少年主人公はLeoである)

彼等はYoung England(少年向け冒険雑誌のタイトルでもある)のアングロ・サクソンの戦士である。(boyという名称を冠したマガジンが1870年代には1ダースもあった)

- 10)「英国の男性の典型は帝国主義者であると同時にどこか、幼児性を残している」。(ジョン・ベッチマン)
- 11) boyはman of actionあるいはman on the spotとして帝国の礎とならなければならない。本を読んで権利ばかり主張したり、自由主義を唱えるのは間違いだ。boyをmanに鍛え上げるのは植民地の効用だと考えること。(anti-intellectualism)
- 12) これらの基準から判断してキプリングは自分が嫌いだった。(Martin Seymour-Smith)背が低く、近視で、本の虫であったキプリングは必要以上に自分をmanlyに見せようとした。
- 13) boyの特徴として学校時代の経験が尾を引いて何時までも青年期が続くこと。*Empire and Sexuality*の著者Ronald Hymanはこれを‘the theory of permanent adolescence’と名付けている。また彼はこれを“The British boyish master syndrome”とも名付けている。キプリングには“persistent streak of puerility(幼児性)”がみられるという。
- 14) スペイン系アメリカ人の哲学者、G.サンタヤナは1992年の*Soliloquies in England*で英国の紳士像を評して“The sweet, just, boyish master of the world”と言っている。

1850年代以降、イギリスではCharles Kingsleyに代表されるような(具体例としては1855年出版の*Westward Ho!*)男性的キリスト教(muscular Christianity)が社会に広まり、特にキプリングが属した、或いは親しくしたaristomilitary階級の理想像としてサンタヤナが述べたような‘boyish gentleman’像が確立した。“The Brushwood Boy”がその理想像を描こうとしている事は明白であるが、「男らしい男は少年性を残している」という理念をキプリングのこの作品は過度に推し進めて、「男らしい男は幼児性を残している」というところまで持っていつている。主人公のGeorgeの名前はイギリスの守護聖人を意識しているのであるが、危機に晒された乙女を救う騎士である筈のGeorgeは逆に彼女に救われると言う場

面もある。ここにおいて上に掲げた“boyish master syndrome”はキプリングの個人的体験の投影を受けて、変形している。そしてそれはboyがいかにか性的に成熟し得るかと言う問いも提出し、キプリングはある種の奇妙な答えを出しているのである。

以上の項目すべてがGeorgeに当てはまるわけではないが、作品中“boy”という言葉が重要な位置を占めていることは間違いない。気付いたことを挙げてみるとまずタイトルの“The Brushwood Boy”がある。作品中では夢の中の少女が“The Brushwood Girl”と呼ばれている。二人は対になっている。少女がプリンセスならGeorgeは騎士、少女が不思議の国のアリスならGeorgeはナイフで怪我をする腕白な少年というように。二人の関係は夢の中では対等である。Georgeが彼女を救うこともあれば、逆の場合もある。夢の中では最後までどちらも性的に成熟はしない。二人の成熟の契機となるのはP&O船上でのMrs. Zuleikaとの出会いである。次ぎに夢の中の冒険で“*They*”に追いかけられた少女は、Georgeの名前を呼ばずに“*Boy! Boy!*”と助けを呼ぶ。つまり、夢の中では二人は固有名詞がなく、普通名詞の存在である。言い換えれば、彼等には個別性はなく、あくまでboyとgirlに過ぎない。夢の中でも他の人物は代名詞のitやtheyまたは抽象的固有名詞“*Policeman Day*”である。作品の冒険のエピグラフは次ぎのようなナーサリー・ライムが用いられている。

Girls and boys, come out to play:
The moon is shining as bright as day!
Leave your supper and leave your sleep,
And come with your playfellows out in the street!
Up the ladder and down the wall—

ナーサリー・ライムでは少年たち、少女たちに眠らずに外で遊ぼうと呼び掛けている。しかしGeorgeと少女は逆に“The City of Sleep”に出

掛けていく。そして物語は“A child of three sat up in his crib and screamed at the top of voice, his fists clenched and his eyes full of terror”と始まる。つまり夢の中の世界はけっして楽しいものではなく、恐ろしい世界であることが予告される。（ともあれこの短編ではキプリングは俗謡やミュージックホール・ソング（作中の“E's going to do without 'em-”という歌は当時の流行りのミュージックホール・ソングである）を織り込むことによって時代性を取り込み、同時に自分の独創性を作り出している。一見、時代に迎合する俗っぽさを示しながら同時に個性的でもあるところがキプリングの特色である。）

ここで再び現実の次元のほうのGeorgeについてboyishnessの問題を見ておこう。パブリック・スクール時代も軍隊時代もGeorgeは男女ともに憧れ崇拝されるような非のうちどころのないboyである。多くの女が接吻をしたくなるようないい男である。モリソン伍長の妻などは彼を見て“I want to kiss him. Some day I thik I will. Heigh-ho! she'll be a lucky woman that gets Young Innocence.”と言う。女性に話しかけるとき、はにかむような表情をするGeorgeはそのために女性の心をくすぐるboyとして描かれている。そして仲間からはアーサー王の円卓の騎士の中でも最も高潔な「ガラハッド」と呼び掛けられる。そしてある日、彼は再び以前のように夢を見るようになる。“Then he turned in and slept the sleep of innocence, which is full of healthy dreams.”

スポーツに秀でて、人望もあり、性的に潔癖な‘innocent English Boy’の見る夢ならば、なるほど“health”な夢なのであろうと当時の読者は納得したのであろうか？しかし筆者にはそもそも夢に健康も不健康もないように思える上に、実際にGeorgeの夢の内容は性的なものとは断定できなくともかなり奇妙で、むしろ「不健康な」もののなのである。そこにはキプリング自身が見たであろう夢を想定させる複雑な要素が絡んでいる。次ぎにもう少し詳しく“The Brushwood Boy”の夢の内容を観察してみ

たい。

掲載した図でも分かるとうりGeorgeの夢の中の地図は大陸の部分と海から出来ている。海の部分は香港とジャワ島として書き入れられている。その上にはリリー・ロックという水門があってさらにその向こうは未知の大陸である。大陸にはまず砂浜があり、次ぎにbrushwood pile（そだを積んだもの）がある。それから谷と丘陵が交互に続いている。浅瀬のある川と鉄道の駅が描かれている。上部には熱帯地方がある。それぞれの地図のマークの下に文字は夢の中でこれらのものにであった日付の記録である。

海にはSea of Dreamsと書かれている。キプリングの他のテキストでSea of Dreamsという表現が出てくるのは自伝の中である。彼は“I visualized it (i.e. The British Empire), as I do most ideas, in the shape of a semi circle of building and temples projecting into a sea of dreams!”と書いている。従って夢の地図とキプリングの帝国に対する視覚イメージは無縁ではなかろう。では帝国主義時代に育った典型的boyとしてのGeorgeは植民地の冒険と拡張を夢見ているのであろうか？どうも違うようである。実際に夢の記述部分には現地人も戦いもでてこない。インドが舞台になったキプリングの作品の中でもこれ程徹底して現地のことが触れられていない作品も珍しい。彼は夢の中では世界の果てまで出掛けるが直ぐに結局はbrushwoodの所まで戻って安心する。

brushwoodの夢の中で一番問題となるのはGeorgeが恐れている三つのものである。ひとつはPoliceman Dayもうひとつはthey,最後の最も重要なものは死にかけているit=a sick thingである。Policemanは既に言及したように幼児期の夢の中に登場している。彼はGeorgeに威圧的な態度を取り、権威によって規制しようとする。例えば彼はThe City of Sleepから嫌がるGeorgeを現実に関連させようとする。‘they’は夢の少女を虐待したり、周囲から突然襲いかかったりする。彼等は内陸に数多く住んでいる。（その点で植民地の原住民を連想させる）

被害妄想患者は恐怖や攻撃の対象を‘they’と呼ぶが、Georgeもいわれなく自分を脅迫し、苛める対象を‘they’と名付けている。itについてはすでに性的な暗示があると指摘しておいたが、キプリングの他の作品では“Mrs. Buthurst”に用例がある。その性的魅力によって男を破滅させるMrs. Buthurstは“*She has it,*”と表現され、その犠牲となるVickeryは“*I’m it.*”と言っている。（明白な説明なしに用いられるこれらのitは性的魅力を指すのであるが、同時に心理的機制を生み出す危険な人物、人間を破滅に追いやるかもしれない心のうちなる恐ろしいもの(the beast in the jungle)を暗示している）整理すれば、Policemanは単に世間的権威の象徴であり、theyは抑圧してくる不特定の他人や大衆や原住民である。それに対してitは自分の心のうちなるタブーを示している。

結論

表層的にみれば、この物語はヴィクトリア女王の兵士として植民地へ出掛けて手柄をたてた青年の故国への帰還が歓迎と結婚によって報われるという寓話である。彼が母親に向かって言うように(“*Perfect! Perfect! There’s no place like England when you have done your work.*”)立派に任務を成し遂げた士官にとって英国は最高の国である。その後、母親は「必ずしも母親のものではない口に接吻し」、報償として「彼と永年の間、危険な冒険の夢を共有してきた」ミリアムを花嫁として与えるのである。ミリアムは“widow’s peak”(この言葉は2回くりかえしてミリアムの描写に使われている)を持った女性である。“widow’s peak”は早く夫を亡くす予徴と言われるので若き頃のヴィクトリア女王をおもわせる。後に“widow”となる女王に似たミリアムと結婚することによってGeorgeの「抑圧」は消え去る。“The Brushwood Boy”は性的抑圧(すべての点でperfectなGeorgeは他の抑圧を持っていない)が権威を持つ大人の女性と(同時に国家と)一体化することによって解消する物語であるとの解釈も成立する。しかし、もしそれだけの物語りだとすれば、ミリアムが貴族の

血筋であり、(ユダヤ人ではなく)遺産もたっぷり持っていると言う条件だけで足りるはずである。なぜ彼女が幼年時代からのGeorgeの夢の共有者でなければならなかったのだろうか？

一つの仮説であるが、夢の中の少女はキプリングの妹、Alic(通称Trix)でもあるのではないかとすればこれは近親相姦の話に近くなる。

キプリングの自伝的な要素の強い作品では殺人の衝動と自殺の衝動に駆られる場面がある。ひとつは言うまでもなく、“Baa Baa, Black Sheep”のなかでPunchがHarryとAnty Rosaに殺人の衝動を覚えるところである。最初の衝動は学校で苛めにあったPunchが相手に反撃したところをHarryに止められて責められる場面である。 (“Black Sheep looked up at Harry's throat and then at a knife on the dinner-table.”)この時のHarry殺害の願望は非常に強く、「殺さなかったことを悔やんで泣いた」とある。次ぎに「嘘つき」と書いたカードを背中につけて歩くようにAnty Rosaに言われる場面がある。その時、Punchは答える。“I shall burn this house down, and perhaps I'll kill you.”Punchは憎悪する彼等を殺すことができないと知ると毒物を舐めて(子供であるから玩具のペンキを舐めるだけだが)自殺を試みている。

Mrs. Zuleikaのモデルと考えられるMrs. Hillはインドに招聘された気象学者の夫とバンガローに住んでいたアメリカ人女性である。彼女たちはキプリングに部屋を使わせていた。Lord Birkenheadは彼女は1888年にキプリングが“Baa Baa, Black Sheep”を書くのを手伝ったと述べている。彼女はまた執筆時キプリングは過去の酷い思い出に憤激を隠しえなかったと言っている。ともあれカルカッタから1889年に帰国の船旅を伴にしていることからMrs. ZuleikaはMrs. Hillがモデルと考えられるのである。またGeorgeがMrs. Zuleikaを“admire”するようにキプリングがMrs. Hillを“admire”していたことを複数の伝記が指摘している。

“Baa Baa, Black Sheep”では、幼い兄妹(キプリングは6才)をサウス

シーの養父母にあずけてボンベイに帰っていった母を追ってPunchはJudyの手を引いて海のほうに出掛けていく。自分がなぜ置き去りにされたのか理解する力のない子供にも自分の不幸の原因を消し去りたい、それができないなら自殺したいと言う願望がある。ここで先に引用した夢の中で家に侵入する場面を再読してみよう。白い漆喰に塗られた通路を通っていくと部屋がある。そこには“a sick thing”がベッドに横たわっている。少しでも音を立てたら、恐怖が解き放たれるだろう。一緒にいる少女が子供であることになぜここで嫌悪を覚えるのか？これまでの夢の場面では少女が成熟した女である事を求めるような場面はなかった。とすれば、先のように性的に未成熟な少女を相手に性的体験をしようとしている際の緊張感であると解釈できるだろうか？SullivanのようにBrushwoodやlamp-postにいたるまで夢の中の事物にすべて性的イメージを読み込むことが可能だろうか。

性的抑圧のイメージを読まないとしたらもう一つ可能な読み方は殺人か自殺である。

Itが女性(例えばAnty Rosa)ならGeorgeはそれの首を切り落とそうとしているのかもしれない。そのときそばにるのが子供では何の役にもたたない。同様にItが男ならGeorge自身が自分の首を切るのもあって、その場合も傍らにるのが子供では何の役にもたたない。

夢の中には無意識に沈殿している過去の記憶が前後の脈絡を無視して同時的に現れるとすれば、個人の時間的に異なる過去の記憶が順序と無関係に結び付くであろう。昼のGeorgeは女王を頂点にいただく帝国主義国家の典型的青年として連続した直線的時間を生きているが、いったん夢の世界に入ると幼児期からの体験は前後を無視して同時的に一見無意味に現れる。当初、キプリングはこの短編のタイトルを“The Infants of Bohemia”とする予定だった。おそらく二人の少年と少女の夢の世界の部分に重点があったのだろう。それが次第に現実の次元ではGeorgeの出世(imperial development)が表に出てきたのであろう。結末をつけるには

夢の中の少女が現実の成熟した女として現れてGeorgeと結婚することは都合が良い。

無意識と意識、狂気と理性、闇と光というような二項対立程便利なものはない。これらは手品のごとく、説明の付かないものを半対項においてやってしまうだけだからだ。従ってここではあまり分裂したキプリング、昼と夜の意識の分裂というような観念に頼りたくはないのだが、次のようなキプリングの詩に出会うとどうしても彼の内なる宿命としての分裂を考えざるをえなくなる。それは1928年、キプリング63才のときの“The Mother’s Son”である。

I have a dream—a dreadful dream-

A dream that is never done.

I watch a man go out of his mind,

And he is My Mother’s Son....

And it was *not* disease or crime

Which got him landed there,

But because They laid on My Mother’s Son

More than a man could bear....

They broke his body and his mind

And yet They made him live,

And They asked more of My Mother’s Son

Than any man could give....

And no one knows when he’ll get well

So, there he’ll have to be.

And, ’spite of his beard in the looking-glass,

I know that man is me!

この詩によればキプリングは“the house of desolation”で一生涯消えない魂の傷を負ったことになる。「彼等は彼の体と心を破壊しそれでも生かしておいた」というのは熾烈な体験である。Leonard Shengoldの精神的分析的研究はキプリングの初期の悲惨な体験を「子供の魂の殺人」という観点から洞察している。初期に親から無理やり引き離された子供の心に残る精神的傷についての研究から彼はキプリングの体験の後遺症としての精神の分裂を指摘している。彼はキプリングと妹の関係について次ぎのように書いている。

The presence of his sister at Lorne Lodge helped strengthen Kipling's masculinity and also his identity. Toward her he was able to feel and act like the protective parent that both so needed. Trix was grateful for and craved his care. She was the living link to his home, his parents, and his past. His memory and his gift for storytelling allowed him to become the author of, and Trix his primal audience for, a Family Romance based on real events. He could identify with Mother and Father and the *ayah*, and so both children could hold on to them.⁶ Trix's devotion continued the love from and for a female that was not swept away by Rudyard's hatred for the Woman. Together the two children could retreat from the desolation and persecution of their daily life to the sanctuary created by the boy's imagination. To create a wonderful and sometimes a terrible world for abandoned children made Rudyard a god who need not fear abandonment. He could know what was what, reward the deserving and punish the wicked. Throughout his long writing career he was obsessed with the family romance,⁷ and what began with Trix continued

in his books.

妹のTrix(作品の中ではJudy)を両親と繋がる唯一の絆、現在の地獄から以前の天国に至る最後の蜘蛛の糸と感じていたPunchは物語りを創り、自分と妹に語り聞かせることで精神のバランスを取っていたのであろう。その意味で“The Brushwood Boy”のGeorgeと常に一緒にいる夢の中の少女が彼の作り出したプリンセスであると同時に物語りを語り続ける原動力としての妹と解釈しても良いだろう。Shengoldの言うように二人の間に性的な遊戯があったかどうかは分からないが、キプリングがこの短編の最初のタイトルに“The Infants of Bohemia”を考えた背景には自分と妹のふたりのinfantsのイメージがあったと考えられる。

物語りの共有者としての妹がいなければ、キプリングはさらに酷い精神障害に陥っていたかもしれない。その意味で彼の夢までを共有してくれる女性としての妹が成熟した女性として彼と結婚してくれれば……という無意識の想像力がミリアムを生み出した可能性がある。ここまでは来るとこの短編の結末の読みにもう一つの解釈が加わることとなる。もしミリアムがキプリングの妹アリスを暗示する女性として(キプリング自身によって無意識的に)描かれているとするなら“but-what shall I do when I see in the light!”という結末のミリアムの言葉はキプリングの最もタブーとする心の中のItの問題に再び結び付いてくるのである。

既にのべたようにGeorgeはinnocentなboyでその見る夢も‘healthy’な時代の子であるとされている。彼は作中のジンゴイズムをおもわせる歌にあるように(“Es going to be a martyr on a‘ighly novel plan”)帝国主義の時代像にぴったりの青年である。キプリングは理想像としてのGeorgeを比喩的に完璧に描いている。あまりに完璧なので現代の我々から見るとパロディではないかと思えるほどだ。しかし同時にキプリングは自分の内なる分裂に気付いていた。現代の作家なら狂気とか分裂のみに執着するであろうが、キプリングは時代の価値観に沿って健康児のGeorgeを描いた。結果として夢の中で狂気と分裂は描かれた。キプリングの

キプリングのインドへの道：「ブラッシュウッド・ボーイ」論（橋本）

分裂症についてランダル・ジャレルが巧みに書いている。

「この様に彼の世界は二つに分裂していた。彼自身も分裂していた。すべてを斟酌し何事も咎めないキプリングとすべてを許さず、すべてを責めるキプリングがいた。そして後者の部分を彼は認めなかった。とりわけ自分自身に対して認めようとしなかった」

(終)



The Brushwood Boyの夢の地図
(キプリング自筆)

(英米文学科 教授)